

7月度月例会講演録

日時:2019年7月9日(火)12:00～

講師:西林 万寿夫氏(国際交流基金 ローマ日本文化会館館長)

演題:「日・イタリア交流の歴史と現在」

1. 序

- ・ 2年前の8月に、4年近く勤めた在ギリシャ大使を最後に退官したが、その数カ月後に国際交流基金ローマ日本文化会館館長に就任した。
- ・ アテネ／ローマ、ギリシャ／イタリアの違いをよく問われる。いずれも南欧的、陽気でおおらかな雰囲気というところは共通しているが、歴史の重みが異なる。
- ・ 民主主義発祥の地ギリシャは紀元前5～4世紀がピークで、アレクサンダー大王遠征あたりまでは世界史の教科書にも詳しい記述がある。しかしその後はローマ帝国やオスマン帝国の傘下に入り、古代と現代の歴史がほとんど繋がっていない。
- ・ 一方イタリアは歴史が重層的に繋がっている。ローマについて言えば、建国(紀元前 753 年と言われる)後、共和制の時代を経て、紀元前 27 年にローマ帝国ができこの頃地中海世界を制覇。「すべての道はローマに通ずる」と言われる程の繁栄を謳歌した。そのローマ帝国が分裂した頃にキリスト教が認められ、カソリックの中心として栄えた。14 世紀にはルネサンスが始まり、イタリア史は教科書に度々登場する。そして 1861 年にイタリアが統一された。

2. 日本・イタリア交流の歴史

(1) 16世紀～17世紀

天正遣欧少年使節団

- ・ 日本とイタリアの初めての出会いは、天正遣欧少年使節団。キリシタン大名大友宗麟らの名代として、伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルティノの4人の少年(派遣時13～14歳だったと言われる)がローマに派遣された。
- ・ この使節団は、日本に滞在していたイタリア人宣教師ヴァリニャーノの薦めにより布教活動の一環として派遣されることになり、1582年に長崎を出港。1585年3月にローマ教皇グレゴリウス13世に謁見。ほどなく、シクストゥス5世が教皇となったが、使節団はその就任式に参列している。
- ・ ところが、使節団が日本に戻った1590年は既にキリスト教布教に対する制限が始まっており、状況が変化しつつあった。そして帰国後の4人は、棄教したり処刑されたり国外に逃げたりと、それぞれ異なる運命を辿っていく。
- ・ 天正遣欧少年使節団の意義は、ヨーロッパを訪問した初めての日本人であること。ヴァリニャーノが日本人について礼儀正しい人達で、日本は清潔な国と感銘を受けたことを背景に、日本のプラスイメージが広がったことも大きい。更に、使節団が西洋の文明を持ち帰ったという意味もある。海図やグーテンベルクの発明した印刷機を持ち帰り、我が国の発展に寄与。西洋の楽器も入ってきた。

慶長遣欧使節団

- 1615 年には、伊達政宗の家臣であった支倉常長をヘッドとする慶長遣欧使節団がローマを訪問している。この使節団はメキシコと交易を行うことを目的に派遣されたもので、天正遣欧少年使節団とは異なる意味を持っていた。
- 1613 年 10 月に石巻を出航した後、メキシコに行き、2 週間だけだがキューバに立ち寄った。その後スペインに行きフェリペ国王に会ったりしたが、更に 1615 年 10 月にチヴィタヴェッキアというローマの外港に上陸。ローマでは教皇パウロ5世に謁見している。支倉常長は何故ローマを訪問したのか。スペインでメキシコ(当時スペイン領)との交易の許可を取ろうとしたがうまく行かず、自らキリシタンに改宗し、お墨付きを得るためローマに来て教皇に会ったと伝えられている。
- 支倉常長は 1620 年に帰国したが、既に禁教令が出されており、失意のうちに 2 年後他界している。慶長遣欧使節団の意味は、日本人として初めて太平洋と大西洋を渡ったこと。またヨーロッパで最初の外交交渉が行われたこと。
- 自分は以前在キューバ大使も務めていたが、キューバを初めて訪問した日本人が支倉常長であることは現地でよく知られている。ハバナにもチヴィタヴェッキアにも支倉常長の銅像が建てられており、デザインが似ていて興味深い。
- 仙台市美術館所蔵の支倉常長の肖像画は、長く日本人を描いた最初の油絵と言われていた。国宝でありユネスコの記憶遺産にも指定されている。ところが支倉常長の 30 年前に伊東マンショを描いた油絵が今から 10 年前に北イタリアで発見され、これが最古のものとなった。

シドッティ神父

- 18世紀に入るが、シドッティ神父についても付け加えておきたい。シチリア島パレルモ出身のシドッティはローマ教皇庁の法律顧問を務めていたが、日本でキリシタンが殉教していると聞いてマニラに数年滞在した後日本に渡ってくる。
- 1708 年に屋久島に上陸するも直ぐに捕らえられ、翌年江戸に連れて来られる。江戸で儒学者新井白石が尋問した際、新井はシドッティ神父の人格と識見に感銘を受け、本国への送還を具申するも聞き入れられず、シドッティは当時小石川にあったキリシタン屋敷に幽閉され、1714 年にそのまま亡くなっている。5 年前にそのキリシタン屋敷跡からシドッティの遺骨が見つかったとして大きな話題となった。

(2) 19 世紀～20 世紀前半

日伊修好通商条約

- 1861 年にイタリアが統一され、イタリア王国が成立した。その 5 年後の 1866 年に日伊修好通商条約が締結された。これには絹が関係している。当時仏や伊では絹産業が栄えたが、蚕種(カイコの卵)の病気が流行し壊滅状態となったため、商人が感染されていない良質の蚕種を求めて 1860 年代に日本にやって来た。蚕種をイタリアが輸入するためにも修好通商条約が必要であった。
- 当時の北イタリアはトリノを中心として絹産業が盛んであった。自動車のフィアットは 1899 年にトリノで創業したが、フィアットの前身は織機を製造していたという話を聞いたことがある。トヨタもスズキも同じである。自動車を生産している大企業の源流が織機産業にあるという点が興味深い。

岩倉使節団

- ・ 岩倉具視をヘッドとする使節団が 1871 年から 73 年にかけて欧米に派遣された。不平等条約改正の目的は果たせなかったが、欧米事情を視察し大きな成果をあげている。イタリアには 1873 年 5 月から 6 月にかけて滞在し、養蚕業も視察。
- ・ なお、岩倉具視の子孫で、ダンテ研究で有名な岩倉具忠京大教授(故人)がローマ日本文化会館の第 10 代館長(1993～94)であったことを付言しておきたい。

お雇い外国人

- ・ 幕末から明治初期にかけて、我が国の近代化に向けて西洋の知識を取り入れるため、英、米、仏、独から多くの「お雇い外国人」を迎えた。イタリア人については、それほど数は多くなかったが、非常に重要な役割を果たしている。代表人物として紙幣や印刷技術の基礎を作ったキョッソーネ、彫刻を指導したラギーザ(タマ夫人は日本初の女性西洋画家、夫の故郷シチリア島で活躍)、建築技術を伝えたカペレッティ、洋画を指導したフォンタネージがあげられる。
- ・ その他「お雇い外国人」ではないが、ベアートとファルサーリという二人のイタリア人は写真家として横浜を拠点に活躍。明治維新前後の日本のイメージを写真を通じて諸外国に伝えたという点で、多大な貢献があった。
- ・ 当時は日本からイタリアにも留学生が送られ、彼らは主に洋画や彫刻を学んでいた。明治の近代化政策の中で、英からは産業を、独からは公法を、仏からは私法や軍事を、イタリアからは文化・美術を学んだ。

文化交流

- ・ 次はヴェネチア・ビエンナーレについて。ビエンナーレは伊語で「2 年に1回」という意味であるが、現代美術の国際展覧会であり、1895 年に始まった。日本は早くも第 2 回の 1897 年に参加し工芸品を出品したが、次の参加は 1924 年まで飛んでいる。自国の現代美術を出展・紹介するため、20 世紀初めには欧州各国が自前のパビリオンを建てたが、日本はそこまでは行かなかった。なお 1930 年代にはヴェネチア国際映画祭や演劇祭まで拡大された。
- ・ 伊建国 50 周年である 1911 年には、トリノで産業博が、ローマで美術博が開催された。現在ローマ日本文化会館のあるヴァッレ・ジュリア地区に各国のパビリオンが建てられ、日本も参加して和風の日本館を建設した。洋風の建物ばかりの中で日本風の建物が異彩を放ち、日本の絵画、彫刻などが数多く展示され注目を集めた。その時の在イタリア大使館の担当書記官が後に首相となる吉田茂であった。
- ・ 1930 年には、大倉喜七郎男爵の財政的支援により「羅馬日本美術展」が開催された。横山大観、川合玉堂、前田青邨といった大家を含む 80 人が出展し、177 点の展示があった。彼らの作品がイタリア社会の中で大きな評判となり、一ヶ月余りの会期中 7～8 万人(一説では 10 数万人)が訪れたという記録が残っている。この展覧会終了後、大倉喜七郎氏は作品のほとんど全部を買い上げ、そのうち約 40 点がホテル・オークラ横にある「大倉集古館」に収蔵されている。

(3) 戦後(20 世紀後半～現在)

- ・ 1951 年ヴェネチア国際映画祭で、日本映画「羅生門」がグランプリを受賞。日本映画が世界で認知される契機となったという歴史的な出来事であった。
- ・ ビエンナーレには、1952 年から参加。その頃、イタリア政府から日本館を建てないかというオファーがあ

ったものの予算がなく断念しかかったところへ、ブリジストンの創業者である石橋正二郎氏が多額の資金を出捐してくれ、1956年に日本館がオープンした。日本館は入口近くの一等地にあり、早めに手を打ったことが効を奏している。後発組は大きな会場の端の方で展示せざるを得ないのである。

- ビエンナーレでは、1956年に棟方志功氏、66年に池田満寿夫氏、95年に千住博氏が賞を獲得している。日本館には半年間の会期中毎年約18万人が訪れている。
- 1954年に日伊文化協定が締結された。第二次世界大戦後悲惨な戦争を繰り返さないためには国民同士の相互理解が必要だという認識が広まり、各国とも文化外交を重視。日本も主権回復後すぐに各国との文化協定締結に乗り出した。
- ここで重要な役割を果たすのが吉田茂元首相である。駐伊大使であった1931年には「将来日伊関係は文化外交を主体に考えるべき。文化を基礎にしてその上にレールを敷いていくのだ」とジャーナリストに語るほどイタリアとの文化交流に熱心であった。前述の1911年の経験もあったのだろう。イタリアとの文化協定の締結は加速化され、フランス(1953年)に次いで2番目の文化協定締結となった。日伊文化協定の附属文書に、「ローマに日本文化会館を建設する」との記載がある他、戦災で破壊された在東京イタリア文化会館の再建についても記述されている。
- そして1962年にローマ日本文化会館が設立された。1911年万博の日本パビリオンがあった場所のすぐ近くの土地を伊政府から無償で譲り受けて、国有財産として文化会館が完成した。この会館には日本から皇族もよくお越しになっている。
- 1972年には国際交流基金が設立され文化会館の運営に当たることになった(それまでの10年間は戦前に設立された国際文化振興会が運営)。ビエンナーレの話に戻すと、国際交流基金のもとで初めて参加したのが1976年。ローマ日本文化会館が国別参加部門で事務局としての役割を果たしている。なお、1980年からは美術展と建築展が交互に開催されるようになり、奇数年は美術展、偶数年は建築展ということで、毎年開催されている。建築部門では1996年に磯崎新氏、2012年に伊東豊雄氏が受賞している。
- 1973年に設立された「伊日研究学会」(AISTUGIA)について触れる。イタリアでは日本研究が盛んであり、日本研究者が年1回集まって大会を実施している。日本文学を中心に人文科学の分野で様々な研究がされていて層が厚い。
- 日本語教育についても一言。「イタリア日本語教育学会」(AIDLG)が1988年に設立された。日本語学習者数は約7800人でアジア諸国に比べると少ないが、欧州では仏、英、独に次ぐ。国際交流基金は日本語能力試験を毎年実施しているが、昨年の伊の受験者数は1300人。仏(1600人)に続き欧州で2番目の多さであった。
- 最近の大きな行事は、2012年に実施されたローマ日本文化会館設立50周年の各種記念事業。2015年にはミラノで食の万博が開催されたが、日本は金賞を受賞し日本食の大きなブームを作り上げた。イタリア人は元来食に保守的であるが、これを機に各地に日本料理店が開店して人気を博している。そして2016年が日伊外交関係150周年にあたり、日伊両国で300件近い数の記念事業が行われた。ミラノの食の万博と相俟って対日関心が非常に高まっている。

3. ローマ日本文化会館について

- 残りの時間でローマ日本文化会館の紹介をさせていただく。
- 玄関にある看板の揮毫は吉田茂元首相によるもの。会館が吉田茂のイニシアチヴで造られたからで

ある。4400 平米の土地があるが、その 2/3 が会館で、残り 1/3 は日本庭園となっている。会館の建物は著名な建築家の吉田五十八の設計により、和風の造りとなっている。庭園は中島健という造園家の設計によるもの。純和風の壮麗な建物の傍らに日本庭園があるということで、非常に立派な設えである。

- ・ ローマ日本文化会館は日本政府が創建した海外で初めての日本文化紹介施設。こうした政府や基金が所有する施設は他にケルンとパリの日本文化会館だけ。その他の国際交流基金が運営する日本文化センター(20 箇所)は総て借り上げである。
- ・ 年間 5 万人位の来館者があるが、日本ブームのお蔭で 5 年で 5 倍に上っている。日本庭園には 5 年で 10 倍近い人が見学に来ている。150 人を収容する多目的ホールがあるが、能・狂言や伝統音楽などのパフォーマンスものを実施するとたちまち満席になる。映画や日本文化講演もここで実施。展示ホールも備えており、年間 3 件ぐらいの展示会を実施。最近では日本の一流の写真家が撮影したスポーツ写真を 85 枚展示し好評を博した。来年の東京オリ・パラの前宣伝の意味もある。日本語教室についてはクラスルームが5つあり、学生を中心に年間 600 人が勉強に来ている。大きな図書館もあり、3 万 6 千冊の蔵書を所蔵している。

4. 最後に

- ・ ある日本の TV 番組で、イタリア人 1000 人に有名な日本人の名前をあげてもらったところ、サッカー選手(中田、長友、本田)がベスト 10 の1位、3位、5位に入った。イタリアにおけるサッカー熱から見て自然なことである。そしてアニメ作家(宮崎駿と鳥山明)も2位と8位に入っているが、黒澤明が4位。「羅生門」などの影響が凄い。吉本ばななや村上春樹も6位と7位に入っているが、多くの作品がイタリア語に翻訳されているためであろう。9 位に北斎、11 位に広重の名前が見えるが、最近ローマなどで彼らの浮世絵展覧会が実施されたことが大きい。10 位が建築家の安藤忠雄ということでアカデミックな分野での関心も高く心強い。
- ・ そのような次第で、イタリアにおける対日関心が高まっているのは喜ばしいが、日本人のイタリアに対する関心度にはまだまだ及ばない。このバランスの悪さを是正することが課題である。ちなみに日本からイタリアへの観光客は年間約 40 万人であるが、イタリアから日本へはその数分の一程度である。しかし最近急増中で、数年前に数万人だったが今や 15 万人に増えている。特に2週間程度の長期滞在者やハネムーンで来られる方が多く、日本に対する憧れや関心が高いことが看取される。
- ・ 文化事業というものは、1回きり実施するだけでは浸透しない。繰り返し壁を刷毛で塗るような作業が必要で、常に中長期的観点に立って戦略を考えないといけない。文化事業はすぐに結果が出るものではなく、数十年単位で花が咲く。そういう息の長い努力の積み重ねを通じて、親日家や知日家を育てるのが国際交流基金の使命であり仕事であると考えている。

(以上)